

報道関係者各位
《プレスリリース》

2014年2月吉日
筑波大学 創造的復興プロジェクト
代表 五十殿 利治

映画『いわきノート』完成披露上映会 追加開催について

先だってお伝えしましたように筑波大学創造的復興プロジェクトでは、アップリンクと共同で制作したドキュメンタリー映画『いわきノート』の完成披露上映会を開催し、いわき会場では約160名、筑波大学会場では約260名の来場をいただきました。

このたび、反響の大きさを踏まえ、震災発生から3年を迎える3月11日に下記の要領で追加上映会を実施することとなりました。報道関係のみなさまにおかれましては、復興支援の意義に鑑みて、周知にご協力賜りますようお願い申し上げます。

なお、市原健一つくば市長より開演時にご挨拶を賜る予定です。

記

日時 3月11日(火) 18:30～開演・上映

会場 MOVIX つくば シアター4 (イーアスつくば3階)

- ◎ 当日9:30よりチケットの発券を開始します。
- ◎ チケット発券時に座席位置を決定します。
- ◎ 定員120名(招待を除く)を先着順にご案内します。満席になり次第、発券を終了させていただきます。
- ◎ 上映終了後に20分間のトークショーを予定しています。

【チケット発券に関するお問い合わせ窓口】

MOVIX つくば

24H自動電話案内: 029-868-7200 URL: [//www.movix.co.jp/](http://www.movix.co.jp/)

茨城県つくば市研究学園C50 街区1 イーアスつくば3階

以上

<本件に関するお問い合わせ先>

筑波大学 CR プロジェクト室 (担当: 飯田、橋本) ホームページ www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~cr
029-853-2813 cr@geijutsu.tsukuba.ac.jp

<創造的復興プロジェクト概要>

筑波大学芸術系が中心となって創造的復興をめざすプロジェクト。筑波大学の多領域にわたる専門分野と芸術とが協働し、学生とともに被災地の多様なニーズに応えることを目的とし、創造的復興-Creative Reconstruction-を目指します。

『いわきノート』 内容紹介

紡がれる声で見えてくる被災地の現在

福島県の南部に位置し、福島第一原発から最寄りの都市であるいわき市。かつて炭鉱の賑わいや、映画フラガールで知られる街です。東日本大震災では446名が犠牲となり、現在も福島第一原発の周辺町村から2万人以上の避難を受け入れています。

環境変化のストレスや風評被害が住民たちにのしかかる状況の中、「未来会議 in いわき」が開催されています。それは市内外から職業も年齢も考えも異なる人々が集い、自らの経験や思いを語る場です。カメラは偶然に出会った人々による対話が無数に発生し、過去から現在そして未来に向けて対話が発展する様子を追います。

会議に立ち会ったあとで、カメラは参加者ひとりひとりの日常をも見つめます。農業や漁業に携わる人、子育て中の母親たち、教師と高校生、僧侶やサーファーなど。そして今なお仮設住宅で生活する人たち。映画は、市井の人びとが語る言葉をひとつずつ照らし、一人ひとりの物語を丹念に描いてゆきます。

86分 HD ©筑波大学 2014

FUKUSHIMA VOICE について

筑波大学創造的復興プロジェクトと映画配給会社 UPLINK との合同プログラム。筑波大学からは専攻がまちまちな11名の有志学生が参加、映画製作の専門家の大澤一生（『100万回生きた猫』プロデューサー）、島田隆一（『ドコニモイケナイ』監督）を迎えた。

震災の記憶が風化しゆく現状を感じていたという彼らの合い言葉は“福島の人たちの声を世界に届ける”。

2013年3月からの現地リサーチ、撮影・インタビュー実習、取材対象者への交渉を経て、同年9月にいわき市にて取材合宿を実施した。未知の街で丹念に取材した結果、撮影素材はのべ90時間にも及んだ。本編では人々の言葉と市内の情景とが、人々の声を紡ぐ映像として構成されている。

2015年春からは、各地で自主上映会の開催と国際映画祭への参加、ホームページを開設してのweb展開を予定している。

来場者の声から／いわき会場

福島を題材としたドキュメンタリーはこれまでかなりの数つくられてきましたが、どれもつくっている側の主張が強くて、現在そこに住む者としては複雑な気持ちでいました。この作品はリアルないわきの声を学生というニュートラルな存在が吸い上げるということで、何となく安心して見れました。もっと現実には複雑だし、もっと複雑につくろうと思えばできると思うんですけど、私はこれはこれで好きです。複雑だけど生きてるっていうのが現実ですから。何かを発するという事は、誰かを傷つけるかも知れないというリスクを負うことです。それを臆せず発した皆さんに敬意を表します。(20代・主婦)

インタビューを受ける側も自然体のような雰囲気は出せていたと思います。映画の作りとしては、極論をいえば住民の声を聞くというそれだけのものだったと思います。いわき市の現状を伝えるとうたうものとしては表面的なものだったと思いました。学生に求めるのは酷かも知れませんが、だからといって1年もかけて制作したものとしては、ちょっと内容の薄いものだったと思います。(30代・会社員)

学生が撮ったという点で、いわきの現状や声をまっすぐ拾い上げているという印象があった。見終わってすがすがしい気持ちだった。農業や漁業に関わる人の矛盾点や葛藤、軋轢がもう少し表現されていてもいいとも思った。(40代・医師)

まだ自分は震災を語らない、語れない。そもそも自分のきもちがわからず、どう表現していかもわからない。そんな中、未来会議に参加し、他人の語る言葉に自分のいたいことを見つけたような気がしました。映画の中の取材を通して語られる言葉や姿に、これからの自分がおぼろげながら浮かんできたような気がしました。(50代・会社員)

自分の知らなかったいわきを知ることができました。震災以降、精一杯生きてきました。少し他の地域の方に知っていただけそうで嬉しいです。(60代・主婦)

映画にも“壁”という言葉がありました。いわき市民の一部の方と双葉郡の避難者との間に見えない壁があり、先日は避難している近所の方との立ち話しを通して避難者の中でも違った意味でそれぞれの壁があるのかと思った次第です。上映後の発言では生きている一人ひとりにそれぞれの心の葛藤がある旨の言葉があり、私も若干救われたような気がします。(70代・無職)

来場者の声から／筑波大学会場

私は当事者意識を持ってないことに負い目のようなものを感じていました。テレビの中で見る津波も原発事故も、日本のこと、自分のこととは思えませんでした。でも、映画を見て、どんな思いを抱えていてもまず動いてみる、知ってみることが大切なのではないかと思えるようになりました。(10代・学生)

「被災者」とくくられています、それはごく一般の人なのだということを改めて感じました。笑顔で振る舞っている人たちがこぼす一言が心に響きました。(10代・学生)

上映後のトークで映画を作ったことに対する責任があるから広めていかなければと話すスタッフがいて、見た側の私たちも見せていただいた者としてずっと考え続けていきたいと思いました。(20代・学生)

自分の知らないところに人間の生き様を見せつけられました。(20代・学生)

ぜひ上映後に未来会議のような形で思いを共有できる場を作ってほしいと思いました。(20代・学生)

いわき出身の大学院生です。いわきに関心を持って制作してもらえたことを嬉しく思います。他県出身の学生に取材してもらえたことも嬉しく思います。(30代・学生)

震災から3年経ち、悩みが解決していくだけでなく変化し複雑化し、無力感さえ感じていると感じました。震災直後だけではなく、今後も日本人として、当事者として考えていきたいと思います。(40代・会社員)

様々な方に話を聞いたその一つひとつが心に響くドラマでした。音楽も素晴らしかったです。この映画のことをたくさんの方々に伝えていきたいと思っています。(50代・主婦)

上映後の質疑応答で「福島に住んで活動しようという気持ちがある人はいますか？」との問いに、スタッフの方が「住めない」と答えていました。それでいいのです。きれいことでは済まされないのです。自分の気持ちに正直に。(60代・主婦)

被災者の笑顔の裏にある悲しみ・覚悟をみることができた。これも学生さんの熱心な応接によるものだろう。他の人に鑑賞をすすめていきたい。(70代・会社員)